

学習意欲を高める具体的方策

広島大学総合科学部

三 浦 省 五

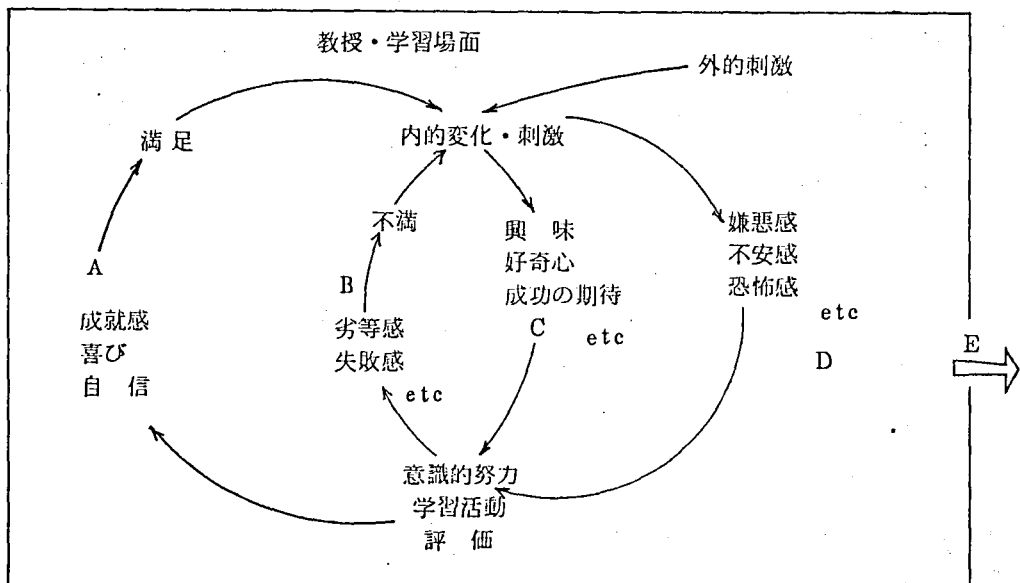
英語の学習意欲を高めるための具体的方策を設定するためには、英語の教授・学習のかかわりにおける学習者の心理的状态を把握することが前提となることは言うまでもない。そのためには、機会あるごとに実態調査を行ない、教材・教授法との関連で現状を分析し考察を繰り返さなければ有効な具体的方策も生まれてこない。意欲に関係する変数は、学習者、教授法、学習環境に関して数多くあり、どの変数が意欲を減ずるように作用しているかは個人によって異なるであろうし、ある方策も学習の経過とともにその有効性は変化するであろう。また、一斉授業における具体的方策は、そのクラスの最大公約数的方策であるがゆえに、その方策が有効に機能しない学習者個人も存在することは当然である。

大学の一般教育における英語教育の改善を目的として行なわれた実態調査には、広島大学総合科学部の「大学英語教育に関するアンケート調査」(昭和51年1月)や「徳島大学における外国語教育改善のためのプロジェクト報告書」(昭和52年3月)などがある。筆者も、昭和50年10月以来、この種の調査を行っており、以下に示すものは、昭和52年6月に、広島大学総合科学部一般教育において筆者の担当する英語クラス(1年次生3クラス計188名、2年次生2クラス、計90名。合計5クラス278名)を対象に行なった調査の報告である。5クラスとも、いわゆる「講読」、「演習」と呼ばれるクラスで、英文和訳を中心とした英文解釈が中心的学習活動である。5クラスのうち、ほとんどのクラスは、週2コマ(100分×2)が英語に割り当てられており、水産産学部1年次生、および英文学を専攻する者には、週3コマ、英語を学習することになっている。学習評価は、毎学期末のテスト、出席状況で決定されると考えてよい。学生は、授業以外に、どの位英語学習に従事しているかという問に対して、週当たり平均「1時間以下」と答えたもの26.4%、「2時間以下」、21.7%、「3時間以下」、20.7%となっており、3時間以下が3分の2を占めている。また、「積極的に授業の英語を勉強しようとしている」と答えた者は、5.5%にすぎない。ほとんどの学生は、「何とかやっつけられる位」とか、「やる気はほとんどなし」と答えている。「英語の授業で習ったことをたびたび考えてみる」者は、1.9%である。大学の英語に対して積極的に取り組めない主な理由として、「教材が自分の希望と合っていない」(278人中46.0%)、一般教育における英語学習の目的がはっきりしていない(39.6%)、「他に(クラブ活動、アルバイトなど)やることがある」(30.9%)、クラスが大きすぎて集中できない(20.1%)を上げている。(最大限5項目の理由を選ばせた。)授業の理解度に関しては、「やさしくてよくわかる」と答えたもの2.5%、「辞書などを手がかりにすれば何とかわかる」、43.8%、「授業に出て説明を聞けばわかる」、38.8%で、残りの約15%の者は、よくわからないと答えている。また、学習意欲の原動力となっている理

由としては、「進学、卒業などに英語は役立つ」（67.6%）、「英語国や国民について理解できる」（10.8%）、「多くの異なった人と話せる」（9.0%）、「英語を知れば教育のある人だと思われる」（0.7%）となっている。英語学習の願望に関しては、「完全に英語が話せたらよいと思う」（90.9%）、「英語が必須科目でなくても勉強する」（53.3%）、「英語の原書を読んでみたい」（49.8%）と、願望の高いことを示している。英語そのものに対して、「とにかく英語は重要だ」（67.0%）、「英語の学習については興味がある」（55.8%）、「将業、自分の仕事や知的活動のために必要となる」（60.1%）、「日本人は英語を勉強すべきだ」（77.0%）と、好意的態度を示している。しかし、大学の英語の授業に対して、「やる気がある」と答えた者は、13.8%に過ぎず、授業に満足している者は、13.4%である。「大学の英語の授業に対しては、興味も、成就感も、失敗感も、劣等感も、不安感もない」と答えた者が21.1%もいる。

以上、まとめて大体の傾向を述べてみるならば、学生のほとんどは、現在、「何とかやっていたり勉強しており、1週当たり大体3時間以下を授業以外に費している。「やる気」はあまりなく、授業中の説明や辞書を手がかりとして何とか理解しており、卒業、進学（単位取得）のために学習している。授業に対しては、成就感、満足感はなく、興味と好奇心は薄い。しかし、一方、英語という言語に対する価値感、英語の学習願望は強く、技能別に見れば、「話す」、「読む」、「聞く」「書く」の順で、教材内容の視点から見れば、「日常的英語や時事英語」、「小説」、「専門に關係のある内容」、「社会生活を扱ったもの」などの希望が多い。

さて、学習意欲を高める方策についてであるが、上に述べたような学生の心理状態では、「学生の自覚に期待するわけにはいかない」。何らかの方法で刺激を与えることが必要である。学習意欲（意識的学習活動のための努力）を持続させ、高めるための方策は、次に示す心理のサイクルのうち最も好ましい状態を持続させるものでなければならない。



教育書には、動機づけの方法として、学習者の興味の重視、目的の自覚、成就感、学習結果の知識、賞罰、協力と競争を上げているが、そのためには、常に評価（自己評価を含む）がなされなければならない。A→Cのサイクルが最も好ましく、続いてA→D、B→Cの場合が考えられる。

B→Dのサイクルを継続している学習者は、Eのように、学習場面から遠ざかってしまうであろう。

上記の広島大学生の場合、英語の授業に関して「何も感じていない」者が20%もあり、半年に1回の試験では、学習を停止してしまう期間が長くなるのである。

筆者は、51年後期に約300名の学生に対して、毎週テストを行ない、評価した。その結果、「勉強する気になった」(47.3%)、「努力した」(55.2%)、「不安であった」(50.7%)、「毎週テストで学期の成績評価を行なうのがよい」(64.2%)で、これに反対する者は、9.1%であり、学生は評価されることを望んでいると考えてよい。このように何らかの方法で学生の心理状態をとらえ、それをもとに学生を学習に駆り立てる方法を、状況に応じて工夫しなければならない。広島大学生が答えた、英語学習に対して積極的になれない4大理由は、大学一般教育の原点に立ち帰らせる問題であり、そのカリキュラムと運営の方法は根本から考える必要があるだろう。